

<新刊紹介>一所定住型の批評宮為梶木剛著 『写生の文学』寸感

小笠原, 賢二 / オガサワラ, ケンジ / OGASAWARA, Kenji

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

116

(終了ページ / End Page)

116

(発行年 / Year)

2001-07-14

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020184>

一 所定住型の批評宮為

梶木剛著「写生の文学」寸感

小笠原 賢 二

著者は子規好き、子規派好きを自称する。確かに、正岡子規及びその系列への長期をかけての探究は著者の仕事の主軸をなしている。子規、長塚節、斎藤茂吉については既にそれぞれ単行書を持っている。「正岡子規、伊藤左千夫、長塚節」なるサブタイトルの本書もその一環であることは言うまでもない。どっしりとした腰の決まり方である。

表現者に、一所定住型・農耕民型と、一所不住型・遊牧民型があるとすれば、著者は明らかに前者に属するだろう。どちらかと言えば後者に列なる私などには土着的な持続力に対してはいつも、自分とは違ふと畏敬の念を抱くのである。ここで著者が、力をこめて語るのとは子規の「文学革命」である。子規は、理屈に墮する宗匠派月並派の俳諧を否定し、古今集の伝統としての理屈を排して、自

然をあるがままに見る俳句や短歌を目指した。芭蕉俳句の過半は悪句駄句であり連俳は文学に非ずと退け、御歌所とそれに連動する旧派を痛烈に弾劾した。

いや、子規の射程は短詩型だけに限られていなかった。当時支配的だった形容過多の漢文崩しの持文体、優美な言葉を擬古的に連ねる雅文体、駄洒落を連発する戯文体を脱する「有のまゝ」を指向した。この「写生文」の提唱が弟子の高浜虚子を媒介して夏目漱石にも多大な影響を与えた事実、子規の「文学革命」の根源性の端的な証しである。

「写生」とは言っても、もちろん客観的な実景の素朴な印象などではない。想像も感動も実感も含む「非主非客」なのである。この「写生」概念が、左千夫や節や虚子を経て茂吉において大きな展開をとげる様を、著者は微に入り細をうがつ形で明らかにして行く。以上の経緯が第一部の中心を成している。続く第二部は左千夫の生と仕事の「観望」であり、第三部は節の長篇小説「土」の批評史論で、いずれも読み応え十分だ。

それにしても、著者の子規派、あるいはアララギ山系に対する思いの深さには

並々ならぬものを感じる。くり返しもあえて辞さぬ程に語り口は熱い共感に満ちてねんごろである。同士感にあふれていると言ってもよい。同士の一人として子規派の語らいの場に同席し、その機微を黒子然として報告しているような趣さえ漂う。それでここには、批評家の伶俐な分析と言うよりも、もっと至近距離に身を寄せた結果、体温まで伝わるような磁場が成立している。更に言えば、この文体は相当に作家的である。これは以前の著者にはなかった特徴と思われるのである。一所定住型・農耕民型の感性が大変生々と作動していると再び言ってもよい。そう言えば左千夫にしる節にしる、子規派自体が農耕社会の表現者で占められていた。「写生」概念もその所産と言えなくもない。この意味でも子規派は著者にとってかけがえのない対象なのである。

(おがさわら けんじ・文学部講師)

▽二〇〇一年・短歌新聞社・三五〇〇円

△著者Ⅱ文学部講師